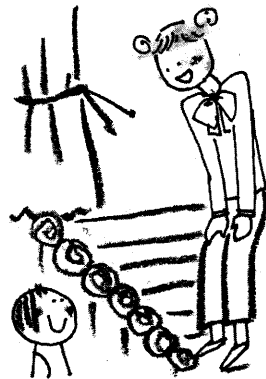


特集

子どもと春

Y君のいない卒園式

江波 諄子



式を前にして

今年の卒園式は、二歳からずっと成長を見てきたY君がいません。

週に何度となくキャンパス内の幼稚園へ行く私は、昨年夏休み明け、彼が引越すことになったと母親から知らされました。その日、園庭で彼に近づくと、ブルーのカラー帽子を半分脱ぎ、髪の毛を切ったと伝えてきました。珍しく二分刈りの頭は、毛並みに沿って触ると滑らかで、私は「とってもいい気持ちね」と

言ったように思います。彼の涼しそうな目、そして、幾分元氣のないほほ笑みが印象的な無言の別れの場面でした。

Y君は、この園を去ることをどんなふうを受け止めているのだろうか？ けれど、引越しについて彼と直接話す勇気がわいてきませんでした。

ある日、母親の様子を聞いてみました。突然の転勤で、今は二歳年上の小学生の兄のK君の転校のことで頭がいっぱいと言っていました。私は、ますますY君の心の中が気になりました。九月末、幼稚園に行

くとY君はもういませんでした。最後の日は、お友達みんながお別れを残念がったと、担任が教えてくれました。

その日の夕方、大学の仕事を終え、途中のスーパーに立ち寄った私は、仕事から気持ちを切り替え、野菜売り場で立ち止まりました。すると突然、涙があふれてきてY君のことを思い出してしまいました。この年になって、担任でもない自分が、不覚にもこんなことでどうして涙があふれてしまうのだろうと情けなくなってきました。

四年間の思い出

Y君は、筆者が大学の授業として実践している未就園児のための親子プログラム「まつの子ぐみ」に二歳から通っていました。兄がいたため幼稚園には慣れており、あちらこちらのコーナーを動き回り、元氣よく遊びました。

その中に、小ビンにろうそくを入れ、火をつけて部

屋を飾る活動がありました。数個の厚めのガラスの容器の中では、小さな炎がゆらゆらとしていました。Y君はそれを見つけると、どのコーナーにいても火を消しに来たのです。「ふーっ」と消すと、また別の遊びに行ってしまうです。マッチをつけるのが困難な学生がようやくまた火をつけると、再びやってきて同じことを繰り返すのでした。そばで見えていた母親が、申し訳なさそうに「誕生日のケーキのろうそくは消すが」これは消さなくていいの」と言っても止めませんでした。後々、このことはとても楽しい思い出となりました。

年長になった四月のある日の午後、「まつの子ぐみ」の部屋に預かり保育のY君がやってきました。私は、新しい壁面造形を学生と考えているところでした。「えなみせんせい、ほく、お手伝いします」と言う彼の言葉と少し大人っぽい表情に、私は一瞬戸惑いました。私は以前のかわいい彼ではなく、今の彼と付き合わなければと姿勢を正し、「じゃあ松葉のモールをはがしてください」と言いました。Y君は、すっかり

二年前に卒園した兄のK君のように成長していました。

二年前の卒園式の日、どの子も式の練習をよくやり、当日は時に愛らしく、時に覚えたとおりに真剣にしっかりと行動できました。その中でも背の高いK君はひととき大きな声で、一つひとつの行動もメリハリをつけ、あまりにしっかりとできたので、参会者の誰もがほほ笑ましくも驚嘆したのでした。これから小学校という未知の世界へ強靱な意志で向かおうとしているのか、いや、幸せに過ごした幼児期の最後の証としてか、力強い成長の姿を私たちに印象的に見せてくれたのでした。そのK君にY君はすっかり似てきたのでした。

式に臨んで

今年の卒園式を私は複雑な気持ちで迎えました。あの日のK君のように、Y君の姿をもはや見ることができないからでした。たまたまお祝いの言葉を述べることになっていましたが、挨拶の内容は文字では準備せず、心の中に子どもたちとの想い出を何度も呼び起こ

して臨みました。壇上に立った私は、子どもたちを見渡しました。Y君はやはりいませんでした。でもたくさんさんの想い出深い、特に二歳児から知っている子どもたちの顔が見えました。

子どもたちは、壇上の私が「おめでとうございませ」と言うのと、大きな声で一斉に「あ・り・が・と・う・ご・ざ・い・ま・す」と言いました。私はマイクに口が接触するくらい近づけ、一人ひとりの子どもと話すように小声で語りかけ始めました。すると子どもたちは、あのしっかりとした返答ではなく、それぞれに「うん」というようにうなずいたり、「ふん」というような表情をしたり、時には、私の言葉に対して自発的な言葉を返してくれました。Y君がいたら、もっと子どもたちと会話を交わす式になっていたことでしょう。それでも、どの子も吸い込まれるように話の内容に入ってきてくれました。あの子もいる。この子もいる。私はY君のことはもう考えていませんでした。こんなにたくさんの子が、圧倒されるような命の

●集● 子どもと春

エネルギーを私たちに放っているのです。子どもと保護者と保育者が、共に一つの喜びを分かち合う卒園式になったような気がしました。

別れの意味

それにしても、Y君は五百キロメートル離れたかの地の幼稚園に数か月通い、どんな卒園式を迎えたのでしょうか？ 何とか穏やかな卒園だったのでしょうか？ 想いは今も続き、答えは空白のままです。

どうして私は、Y君と別れのあいさつを交わさなかったのでしょうか？ 直接の担当者ではないからなのでしょ
うか？ 大人の過重な想いで、小さな子どもにも重荷を負わせたくなかったからなのでしょうか？ それとも、別れはそう簡単なことではないから、そのよりよき方法を見つけられなかったからなのでしょうか？

子ども時代の別れの場面の回想記録（拙著『キーウェイデインの回想』（江波諄子／編著 新風舎 二〇〇五年）が手元にあるので読み返してみましよう。

引っ越し

一人で

三輪車に乗っていると

「今日 引っ越しじゃあないの？」

と仲良しの友達に言われた

突然 大きなトラックがきて

次々に荷物を積んでいる

私は異様な気持ちになった

お隣の大ちゃんは

おかあさんが挨拶にいつでも

お家の中からでてこない

私達のがのったトラックが

走り出したとき

私の頭の中は

悲しみと戸惑いで混乱していた

先生のような先生になろう

卒園式の日

オルガンを弾いていた先生のお顔が

涙で ぐしゃぐしゃになった

先生が泣いている

お別れをする門の所に

先生は なかなか出て来ないので

私は心配になった

やっと出てきた時

先生のお顔は

さつきほどぐしゃぐしゃじゃあなかつたけれど

大きな涙が落ちてきた

なぜだか分からないけれど

(私も先生のような先生になろう！)

と思った

別れはたんに「悲しい」というよりも、これまでに味わったことのない複雑で不思議な感情経験になるようです。子ども時代の回想を集めた筆者の資料によると、そのときの子ども戸惑いが一つのシーン(場面)として語られています。母親が次子出産のため入院するとき、入園当初の親との別れ、祖父母・身近な人々・動物などとの別れが主たる内容です。

一方、子どもの生活空間に時折見え隠れする人、たとえば近所の人、親戚の人、時どきやってくる人(筆者はこのケース)との出会いや別れの感情は、生々しい感情は伴わないが、後に印象的に記憶の底に残るということもあります。Y君には愛情深い両親、大好きな園長先生や優しい担任の先生、そして彼を慕う大勢のお友達がいることを知っていた私は、いわば窓の外から彼との別れの場面を見つめていたのでしょうか？ それにしても、温かい春の息吹が、別れの想いに駆られる私たちを優しく包んでくれるのは幸いなことです。

(常磐大学 人間科学部 教育学科)